



Title	プーシキンの民族性理解について：十九世紀初頭ロシアのロマン主義文学を背景に
Author(s)	後藤, 正憲
Citation	年報人間科学. 1998, 19, p. 249-263
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

プーシキンの民族性理解について

——一九世紀初頭ロシアのロマン主義文学を背景に——

後藤 正憲

〈要旨〉

一九世紀初頭のロシアでは、ロマン主義的觀点に基づく作品が、文学界の主流の位置を占めるようになっていた。それらは理性を絶対視するそれまでの古典主義的規範をうち破り、思考と感情の方向性を文学作品の中に表現していくことを特徴としていた。

考察する。ここで示した民族性理解の内容をもつ作品は、その後時代が推移した後も文学的遺産として形を残し、民族性についての新たな解釈を与える原典となつた。その意味でも、ここでの議論は、後のロシア、そしてソビエト連邦における中心と周辺の民族性理解にまつわる議論につなげて考えられるべき性質を持っている。

当時、西欧の啓蒙思想やロマン主義文学の流入に伴い、それらの思想的影響を受けたロシアの知識人たちは、皇帝の專制政治や農奴制の下で苦しむ民衆に共感を覚え、文学的創作を通してそれらの社会システムに抵抗し、人間の自由の獲得を訴えた。

そうした情況の下で生みだされた彼らの作品には、彼らの、諸民族の独自性に大きな関心をおいた世界観が現れている。そこには、西欧から流入した思想が直接に影響を及ぼしたことだけでなく、ロシアの特殊な地勢学的歴史的な要因も大きく作用したこととも考えられる。

本論文では、ロシアにおけるロマン主義文学の立て役者となつたプーシキンを中心とし、当時の文壇における民族性の問題を巡る議論のもつ性質を

キーワード

プーシキン
ロシア
ロマン主義文学
民族性
デカブリスト

わがうわさはロシアの国原にあまねくつたわるであろう。

そのすべての民がおのがことばでわが名を呼ぶであらう。

ほこりたかきスラヴの子孫もフィンランドの民も、

いまは未開のツングースも荒野の友なるカルムイクも。[↑]

モスクワの中心を走るトペリスカヤ通りに面して、一九世紀の初頭にロシアで活躍した詩人ブーシキンの銅像が建っている。それは、詩人の名を冠した広場の中央にあって、周囲のベンチは街行く人たちに待合わせや憩いの場を提供している。彫像の詩人は堂々と胸を張り、ややうつむき加減の顔は、もの思いに沈んでいるようだ。台座の正面には詩的才能を象徴する豊饒が形どってあり、その側面に右の詩文が刻まれている。これは、ブーシキンが、まるで自分の死を予言するかのようにその半年前（一八三六年）につくった伝説的な詩の一節である。

一八八〇年六月八日、銅像の除幕に向けたロシア文学愛好者協会の記念式典の席上で、ドストエフスキイはブーシキンを評して「他の精神を驚くべき深さにまで感じとり、その中に己が精神を姿を変えて映し出した」と述べた。^②台座の詩からも分かるように、ブーシキンはかなり細かいところで諸民族の差異や特徴を認識し、それに深い関心を持っていて。一般に一九世紀の三〇年代頃までに活躍したロシアの文筆家たちは、個別の民族文化に大きな関心を寄せている。ヨーロッパの文化からアジアのイスラム世界やジプシーの生活まで幅広くテーマにして作品をつくったブーシキンを始め、カ

フカスやウクライナの諸民族に取材したデカブリスト（十二月党員）^③の作家たちがその例である。彼らは、ロマン主義的な詩や論文を通して、民族性の問題を盛んに議論し合った。

先に挙げた講演の中でドストエフスキイは、ブーシキンの作品の中にはロシア人の民族性の精神的な力が頗れているとした上で、それはやがて最終的なところで全人類的な普遍性につながると続けている。彼が言うように、（ブーシキンだけに限らず）当時の議論においては、民族の個別性に関心が払われると共に、それを通して人間に普遍的なものが求められた。

文学界における主流が理性万能主義の啓蒙的古典主義からロマン主義へと移り変わって行つた一九世紀初頭のこの時代は、ロシアにおける国民文学の形成期でもあり、そこで議論の内容が後の思想活動に大きな影響を与えることとなつた。その意味でも、そこで理解されていた概念の分析は重要な意味をもつものと考える。そこで今日は今日理解されているような意味合いとはかなり異なつた形のその時間的・空間的におかれた状況に応じた形の理解が醸成されていたことがわかる。

まず、当時のロシア論壇における「民族」概念への関心が、何がきっかけとなつて、どのように生じたかという、思想的な起点から見てみることにしたい。

思想的導入

このような、一九世紀初頭における個別の民族文化に対する文筆家たちの関心は、その思想的な根底にあるものとして、それに先立つ一八世紀末頃からのヨーロッパ啓蒙思想に負うところが大きい。⁽¹⁾

一八世紀にロシア語に訳されて出版された外国語の散文は、フランス語のものが最も多かつたが、それは当時ロシアで文学の独占的消費者であった上流階級では、フランス語が必須の教養として倣されていたことからも窺ける。社交界では主にフランス語が使われ、ロシア語でうまく表現できない場合は日常でもフランス語が使われた。そのような中で、フランスの啓蒙主義思想は容易に入つて来やすい状況にあったと言える。特に一八世紀の半ば以降のフランスでは、全世界的に共通な人類の発展の歴史を概括的に捉えようとする啓蒙主義者たちの試み——ルソー、ディドロ、モンテスキュー、モレク、ボルテール、チュルゴー、コンドルセー等——が隆盛していた。ロシアにおいても、彼らの著作は翻訳・原文を通して浸透し、「高貴な野蛮人」等「自然のままの状態」の理想化（ルソー、ディドロ）、環境に適合した民族の多様性の理解（モンテスキュー）、文化と理性の成長の歴史（ボルテール）等の概念が、一八世紀末から一九世紀始めにかけてのロシアの思想界に大きな影響を与えた。

一方、当時ドイツでは「疾風怒濤」と呼ばれた文学・学術的潮流が隆盛しており、ロシアにおいても、ゲーテやシラー等の作品が好

んで読まれた。彼らの「世界文化」概念に向けた理想の追究という新たな芸術的取組みは、ロシアのロマン主義芸術の形成にも大きく作用した。中でも、その思想的潮流の旗手として活躍したヘルダーの業績は、ロシアの思想界において大きな意味を持つている。⁽²⁾ ヘルダー自身、二〇歳代前半の若き時代をロシア統治下のリガで過ご⁽³⁾しており、ロシアの多様な民族的編成や、その新たな政治的試みに少なからぬ関心を抱いている。更にペテルブルグでの講師の職への勧めがあったのを、ロシア人の独特な愛國心を職務上の見地から説くことはできないとして、断つたという逸話も残されている。

ヘルダーの著作は一八世紀末から一九世紀初めにかけて、ロシアでかなり盛んに読まれた。ロシア解放思想の父と言われるラジーシュエフ (Radishchev,A.H., 1749-1802) は、自分の著書の中で、ヘルダーが出版の自由に関してエカチェリーナ一世に宛てた啓蒙的要望書の中の一部を引用し、帝政下の厳しい検閲制度の撤廃を訴えている。また、ドルジャービ⁽⁴⁾ (Derzhavin,G.R., 1743-1816)、カラムジン (Karamzin,N.M., 1766-1826)、ヨーロフベキー (Zhukovsky,V.A., 1783-1852) とこゝた、当時ロシア第一級の詩人や歴史家も、ヘルダーに注目し、その著作の一部を自ら翻訳したり、その思想を論文の形で発表したりしている。それら翻訳或いは原文を通じて、彼の思想が広く普及し、あらゆる民族文化の固有の価値が人間の歴史において単一の全体をつくりあげているというヘルダーの弁証法的な文化観が、当時ロシアの思想的潮流を根底から支えたと言っても過言ではない。また、一般大衆の精神世界と民族

文化を一体化して捉える民衆主義（ポピュリズム）的な彼の思想は、後のヨーロッパ全盤におけるフォークロアへの関心を引き起⁽¹⁾こすきつかけともなった。

また、イギリスにおいては、いわゆる「オシアンの詩」の出現が

大きな意味を持つてゐる。これは一七六〇年に、J・マックファー
ソンが、伝説の詩人オシアン（Ossian）の詩をスコットランド高
原において採集したものとして発表したものだが、後にそのほとんど
が編者マックファーソンによる偽作であることが判明した。しかし
し、それにもかかわらず、ヘルダーによつて民族的な創作の見本と
して評価され、ロシアのロマン主義詩人たちにも、民族的な詩に対
する関心を呼び覚ますことになった。

その他に、一八世紀の半ば頃からロシアでは、シェークスピアの
翻訳やその手法を真似た戯曲などが見られるようになり、その他W
・スコット、シェリーといった作家の小説や詩も人気をさかんだ。
しかし中でも、地中海やバルカン半島、トルコを遍歴する上で、個
人の精神の解放や自由を希求する詩を生みだし、オスマン・トルコ
からのギリシア人の独立運動に自らの身を投げ出して死んだイギリ
スの詩人バイロンは、その反逆児的な精神が当時ロシアの作家や思
想家の間で大きな共感を得、ブーシキンやレールモントフは彼を敬
愛した。

これら西洋の文学・思想の流入は、それに伴つて西洋が描写する
ところの東洋の姿をもロシアの文学愛好者に紹介することとなつ
⁽²⁾た。バイロンやT・ムーア、ゲーテ、B・ユーゴー、ボルテール等

の東洋をモチーフとした詩、小説、戯曲などがそれである。また、この頃好んで読まれた本の中には、フランス人のアントワース・ハ
ミルトンの訳した「魔法のお話」（「千夜一夜物語」）なども含まれ
ていた。

また、西洋式の組織的な東洋研究、いわゆるオリエンタリズムも、
一九世紀の初めに西欧から積極的な導入が試みられている。⁽³⁾まず、
一八〇四年にはドイツから東洋学者のフレン（Fren,C.D.,
1782-1851）が招かれ、その頃創設されたカザン大学で東洋語の
専任教授に任命された。一八一年には、フランスの有名なオリエ
ンタリスト、シルヴェストル・ド・サンの下で学んだボルディレフ
(Boldyrev,A.B., 1780-1842) が、モスクワ大学で東洋語を教え始
めている。また、同年、当時ロシアで有力だった文芸誌「ヨーロッ
パ通報」に、ウィーンで西欧のオリエンタリズムに触れたウバーロ
フ (Uvarov,S.S., 1786-1855) による、「ロシアにおけるアジア学
アカデミー設立の講想」と題した論文が掲載された。その中で彼は、
東洋研究の専門的機関を設けて、ロシアにもオリエンタリストの人
員を確保しておくことの必要性を訴えている。結局この構想は実現
しなかつたが、その後一八一八年、ウバーロフは帝国科学アカデミー
の総長に任命され、同年、ペテルブルグにアジア博物館が、中央教
育研究所には東洋語研究室がそれぞれ新たに開設された。

このように、当時ロシアにおいては、西欧で形づくられた東洋觀
の導入という傾向が伺える。それは、一方で文学作品や舞台芸術を
通じた、サイードの言うところによる「通俗的なオリエンタリズム」

(東洋趣味)の側面をもち、他方において、公的機関に支えられた学術体系としての「職業的オリエンタリズム」の性質をもつものだった。どちらにおいても、西欧で形成された東洋観(オリエンタリズム)が、かなり直接的な形でロシアにも受け継がれた。

背景にあるもの

以上でおおまかに見てきたように、一八世紀後半から一九世紀初頭にかけてこのロシア文壇における民族文化に対する関心は、西欧の啓蒙思想、ロマン主義文学の影響を強く受けてのものだった。しかしプーシキンやレールモントフ、デカブリストの作家たちによる文学作品に触ると、民族文化との接し方において、たとえその精神的土壤が西欧に発見できるとは言え、明らかにそれとは異なった、独自の状況において形成された視点をもつてることが分かる。

この、ロシア文壇における民族観に、ある種の独自性を与える主要的な要因となつたものとして、ロシアの西洋と東洋の間に位置する地政学的立場と、そこで展開された皇帝の専制政治と貴族知識人の抵抗勢力との間の葛藤のドラマを挙げることができる。次に、これらの背景的要因を、順を追つて見てみることにしたい。

まず、一九世紀の初めに西洋と東洋とを結ぶロシアが体験した歴史的な出来事として、その双方との戦争があつた。前者はナポレオン戦争、後者は露土戦争である。

ナポレオン率いるフランス軍が一八一二年ロシアに攻め入り、一

時はモスクワを占拠するが、兵力を温存したクトゥーゾフ将軍の率いるロシア軍がその後まき返し、逆にパリにまで攻め上つた一連の戦いを、本国ロシアでは「祖国戦争」の名称で呼ぶ。このことからも分かるように、この戦争はロシア人の愛国心を激しく高ぶらせるものだった。当時一三歳で、ペテルブルグ郊外の皇立寄宿学校で過ごしていたプーシキンも、後の作品の中でロシア軍の凱旋の模様を、情熱をこめて綴っている。

「忘れがたきひと時である！光榮と感激のひと時である！祖国という言葉を耳にするごとに、ロシア人の胸はなんと激しく躍つたことであろう！」^⑨

この戦争には多くの文学学者、詩人が参加している。当時、一般の兵士は農民や町の職人から徵兵して編成され、士官や将校は貴族から成っていた。貴族は、普通ある程度の教育を受け終わると、文官か士官の位を授つたが、それまで戦争と関わりのない生活をしていても、義勇軍に参加することは可能だった。こうして、特に愛国心の醸成していた貴族知識人の間では、多くの者が我先にと従軍し、中にはナポレオン軍を追つてパリまで遠征した者もあつた。そして多くの^⑩が、自分の従軍した経験や、そのあふれる感情を詩や散文に表した。

ナポレオン軍との戦いは、ロシアにとって様々な意義があつたが、その必須として、ロシア人に愛国心と並んで西欧に対峙する自己意識の高まりをもたらした。そこでは、もはやロシアはヨーロッパの後発国ではなく、逆にナポレオンの輻から解放者の誉れに満たさ

れ

た国となつた。そのような意識は、戦後十年ほどたつた一八二二年に、パリでナポレオンの手記が出版された際、素早い反応となつて現れた。実際に部隊を率いて戦つたダヴィードフ (Davydov,D.V., 1784-1839) が、手記の中のロシア軍についての記述をつぶさに調べ上げた上で公表した論文が、当時ロシアでかなり反響を呼んだ。⁽¹⁾

一方、一八世紀の終わり頃から、ロシアはオスマン・トルコ帝国との戦いで優利に駒を進めていた。当時オスマン・トルコの治めていた広大な領土は、ロシアにとつては地中海への、イギリス・フランス・オーストリア等の西欧の列強国にとつては中東を越えてアジアへの入口として戦略的な要衝だった。そのような中、一八二一年にギリシア人を始めとするバルカン半島の諸民族によつて、独立を要求する蜂起が起つた。

この時の、ギリシア人によるオスマン・トルコからの独立要求運動は、ロシアが新しくトルコから手に入れた土地で用意された。始めはオデッサで、ロシア在住のギリシア人商人らの手によつて革命結社が組まれ、後にキシニョフ (モルダベアの首都)、キエフにまで広がつた。軍事面では、ギリシア人でありながら親の代にロシアへ移住し、ロシア軍の将軍職を勤めていたイプシランチ (Ipsilanti <Ypselantes>, A. 1792-1828) が結社を率い、彼の他にも実際にナボレオン軍との戦いにロシア軍の一員として参加したギリシア人将校たちが結社に加わつてゐた。

その頃、反政府的な詩を書いたために皇帝の命を受けて南ロシアに追放されていたブーシキンは、やはり南ロシアの地で革命を準備

していたデカブリストの詩人、思想家たちと共にキシニョフに居合わせ、ギリシア独立運動の闘士たちと深く交流している。

ギリシアの蜂起は、ロシアの詩人や知識人たちには重大な事件だつた。少し後に友人に宛てたある手紙の中で、ブーシキンはこの事件のことについて、「ヨーロッパにとつてはその政治的な関係の諸の方が重要だつたかもしだれが、ギリシア人のことほど民族的な〈narodno〉ことはなかつた」と述べている。⁽²⁾

ロシアの詩人たちはギリシア人の蜂起を積極的に支持した。「ヨーロッパ通報」にはギリシアの軍歌の翻訳が掲載され、ブーシキンを始め、デカブリストの詩人たちは、バイロンがその身を捧げたギリシアの蜂起を、情熱的な詩で称えた。

結局、この時の独立闘争では、ギリシア人とモルドバ人、ワラキア人等の民族間の横の連係がうまくいかなかつたこと、ロシアを始め、ヨーロッパ列強がお互いを牽制し合つて支持に回らなかつたことなどから、バルカン半島の諸民族の独立は実現しなかつた。

しかしブーシキンの言葉にあるように、ロシアの知識人にとってギリシア人の蜂起は、ギリシアの独立運動以上の意味合いがあつた。本国ロシアで皇帝の圧制下にあり、自由への希求や民衆主義の思想に駆り立てられてゐた彼らにとって、政治・経済・文化のあらゆる面から照合した理想の国家像を描くことが最大のテーマだつた。そうした中、古代ギリシア・ローマに人間の理想社会を見出した彼らは、ルネサンスに比する今日において、ホメロスの子孫たちの譲り受けるべきエラーダ (ギリシアの古称、ヘラス) の地を「ト

ルコの重圧」から解放することに、民衆を皇帝の専横や農奴制から解放することを重ね合わせて見ていた。ブーシキンが手紙の中で「民族的な」という言葉で表したのは、単に民族グループとしてのギリシア人がオスマン・トルコ帝国から独立することだけではなく、民族（民衆）〈narod〉が人間の理想的な社会を築くということを意味していたのである。

逆に言えば、ブーシキン他ロシアの詩人たちは、人間の自由の獲得、理想の実現のための闘争という自分たちのテーマに、ギリシア人のトルコからの独立闘争を重ね合わせていた。おまけに今回は、ナポレオン軍との戦いの時のように実際に自分が参加して戦つたわけではないので、彼らの記述から敵であるトルコ人の姿は全く見えてこない。

しかし、ギリシアの独立運動が尾を引いて始まった露土戦争（一八二八年—一八二九年）には、一八二五年のロシアでの蜂起後前戦に左遷されたデカブリストの他に、ブーシキン自身も自ら志願して、少しの期間ではあるが従軍している。カフカス地方を経てトルコに進軍していく時の模様を、彼は後に旅行記としてまとめている。

その中で彼は、道すがら自分の実際に目にした光景に、西欧で生み出された芸術や旅行記、また古典的書物の表現をあてはめ、比較しつつ歩を進めている。山の高みから飛沫をあげて流れ落ちる小川を見てはレンブラントの「ガニメデスの誘拐」の描写を思いだし、チフリス（現在グルジアの首都トビリシ）の沿岸では、イギリスの作家T・ムーアによるグルジア人女性の描写に傾き、アルメニアで

は、不意に眼前に現れたアララト山に聖書のノアの箱舟の幻影を見ている。それから、ヨーロッパ人が異郷の地アジアを見る視線が伺える。

しかしブーシキンは、ただそれ西欧人のアジア観をあてはめて見るだけではなく、それらの表現には極度に限定された情報しかないのを認めつつ、それを自分の観察によって訂正し、補っている。「アジア的贅沢」という言葉ほど無意味な言葉を知らない。この言い回しは、恐らく十字軍の遠征の際、己が城のむき出しになつた壁や櫓のいすを後にした貧しい騎士が、初めて美しいソファーや色とりどりの絨毯、柄に宝石を散りばめた短剣を見た時に生まれたものだろう。今では、アジア的貧困、アジア的不潔などとは言えようが、贅沢は言うまでもなくヨーロッパのものである。^(B)

実際、タタール人やトルコ人等の東洋人に対する見方についても、傷ついた兵士や捕虜になつたパシャ、ペストに苦しむ街の住人たちとの交流を通じて、そこにより人間に普遍的な感情を見出している。そこでは、ブーシキンの視点は「通俗的なオリエンタリズム」を越えて、実際の人々の息づかいに肉薄している。

以上に述べてきたように、一九世紀の初めに、ロシアは西と東に對するそれぞれの戦争を経験し、それを通じて自己と他者に対するベースペクティブを築いてきた。

一方、この時期はロシアがその版図を精力的に広げていた時でもあった。特にエカチェリーナ二世時代の一八世紀半ばから一九世紀初めにかけて、トルコとの戦争で得たカフカス地方やクリミア、或

いは東方に広がるシベリアの大地に、科学アカデミーから探検隊が派遣され、各地の自然・地理的環境やそこで暮らす諸民族の習慣・風俗等が克明に調査されていった。⁽¹⁾これらの探検隊にはロシア人の他にも、ロシアの科学アカデミーに所属するドイツ、フランス、北欧からの博物学者が多く参加しており、探検の記録もロシア語のみならず、多くの西欧の言語で出版されるという国際的な性質をもつものだった。彼ら探検隊の視点は、初めはラフィートー(Laffitan,P.)等の、後になってモンテスキュー・ヤルソー、百科全書派等の啓蒙思想に基づいており、各地で生活する民族をその環境と対応する形で類別し、比較するという手法をとった。このようなアカデミックな調査による情報が、当時の知識人階級に周辺の諸民族についての知識を供給する役割を果たしていた。⁽²⁾

ところがカフカスは、トルコとの戦争にとっての前線基地のような役割を果たしており、平和なシベリアとは状況を異にしていた。チフリスやウラジカフカスといった都市には、流刑者的身分で左遷されてきた者の他に、そこに駐屯する士官や兵士、外交や事務に携わる文官、保養客らによってコロニーが形成されており、現地でだけ発刊される雑誌なども出回っていた。このような状況の下では、現地の住民の生活に深く入りこんでの詳細な民族誌よりも、当時の祖国の運命や人間の理想についての主題に、現地のエスノグラフィーを織り混ぜた文学形式のものが生まれ安かつたと言える。

他方で、当時ロシアの版図の拡大は、皇帝政府をして新たに得た辺境の地を流刑地に定め、政治的反対勢力を中央に寄せつけないことを可能にした。実際ブーシキンは反政府的な詩を書いた咎で追放され、一八二〇年から数年間、カフカス、クリミア、キシニョフ等の南ロシアを渡り歩いた。また後に彼の死を悼む詩の中で暗に政府を攻撃したレールモントフも、カフカスの地に追放されている。また、一八二五年十二月にデカブリストの蜂起が起こった時、絞首刑になった五人の首謀者を除く参加者は、シベリアやカフカスに追放された。

これらの詩人、思想家たちは、それぞれの流刑地で雄大な自然やそこで生活する人々と深く交わって生活することとなり、そこで得

民族性理解の特徴

これまで述べてきたような、当時ロシアの知識人たちのおかれていた状況を考え合わせると、大筋で次のようなことが言える。彼らの、個別の民族文化に対する関心は、まずそこに理想状態を思い描いてそれを重視したことから発している。ギリシア人の独立運動

に対する彼らの反応が明示するように、そこでは古代のヘレニズム

文明が享受していたような、自然と人間社会との完全な融和による全体性の回復が、民族文化の実現と結びつけて考えられた。すなわち彼らは、当時の社会的・制度的な弊害の生み出す閉塞感から脱け出で、再び人間の本来的なあり方をとり戻すために、まずそれぞれに固有の民族文化の実現を条件に据えたのである。

更に、そのころ起った戦争や、政治的な理由による流刑等、当時のロシア知識人を見舞った運命は、彼らと彼らの言う諸「民族」

との現実的な接触を可能にした。そこで、それまでのヨーロッパにおける啓蒙思想とロマン主義文学とに培われた観念的な民族概念に、実際的な見地から修正を加えることによって、独自の民族性理解の発展を見ることになる。

では、こういった経緯をたどっていったロシアの思想界において、民族、或は民族性といった概念は、どのように理解されていたのだろうか。次に、具体的な例としてプーシキンの作品をとりあげつつ、この理解形成の過程及びその特徴について、考察を加えてみたい。

ここでプーシキンをとりあげるのは、彼の理解形成の過程が、当時ロシアの思想界全体の流れを、比較的よく映し出していると考えるからである。

プーシキンは、皇帝の命を受けて南方に追放され、カフカス、クリミアを旅して回った上でキシニョフに赴いていた際、一八二〇年から翌年にかけて「コーカサスの捕虜」（コーカサスはカフカスのフランス語読み。こゝでは日本語訳の通例に従う）を執筆した。これは、彼の初期の作品で、一八二二年にはすでに初版されている。

この叙事詩は、古来の共同生活を営み、先祖の記憶に満たされたカフカスの山村に、半死半生のロシア人捕虜の運び込まれる場面から始まる。彼は虚偽や惡意の渦巻く近代社会に望みを失い、荒野を彷徨つていたところをチエルケス人の捕虜にとられて、この山村に連れて来られたのだ。この病んだロシア人は、チエルケス人の娘の手厚い世話をおかげで元気を取り戻し、彼ら村人たちの生活を観察し始める。

この詩は、よくバイロンの影響が指摘されるのだが、終始ヨーロッパのロシア人と、彼によって観察されるアジアのチエルケス人との対比という構図に貫かれている。そこでは、自由を拘束され、失意に沈むロシア人に対して、雄壮な自然に溶け込むように生活するチエルケス人は、無法なまでの自由を享受し、普段は安逸の中にあらが、いざ戦いとなるとその不撓不屈の精神は残酷なまでの好戦性を見せる。

それに加えて、この詩ではチエルケス人の娘の存在も、ロシア人捕虜との関係において重要な役目を果たす。無垢な乙女の心に宿つた初めての愛に対して、そうした初源性を失ってしまったロシア人の心は答えることができない。結局、ロシア人の愛を得られなかつたことで生きる意味を失ってしまった娘は、夜半に自ら捕虜の鎖を解き、彼が村を脱け出すのを見届けてから川に身を投げる。チエルケス人の娘にとって、ロシア人と出会いは初めての愛の喜びを与えるものでありながら、同時に破滅へと導くものだった。ここに近

代化の抱え持つ矛盾と、当時ロシア帝国の統治下に入つてそれを体験したカフカスの山岳民族に対する、作者ブーシキンの共感が映し出されている。

この作品の中では、チエルケス人の生活が人間社会の理想像として描かれている。家族的な共同生活、自由、素朴さ、処女性等、ヨーロッパの近代社会が失つてしまつた「自然のままの状態」が、そこには息づいている。ここで、この作品はギリシア独立の希望に湧きたつ空気の中で書かれたことを想起すべきである。そこでは、古代ギリシア文明の象徴する自己完結的な世界が、人間らしさに満ちた本来あるべき姿として、チエルケス人の民族的な生活の中に具象化された。

この、理想的なものとしての民族性理解のあり方にはいくつかの特徴が見られたが、まず第一に、その個別性に抛り所が見出された。技法に關して、「コーカサスの捕虜」の中では、多分にフォークロアの要素が盛り込まれている。チエルケス人の服装、装身具（武器）、住居や食事等の生活様式から、民謡、鷹狩りや競馬がくり広げられるラマダンの祭りの様子など、かなり細かい描写がされている。またその中の物質的なものの名称の他に、地名、生物の名称、民族の呼称等、固有名詞を使った正確な限定性が見られる。これら民族誌的な記述や固有名詞の使用は、場の現実性を作品に付与する性質もあるが、そもそも作品の書かれた一九世紀初頭のロマン主義文学において、ものごとの独自性、個別性をもとにした博物学的な分類に関心が寄せられていたことの顯れでもある。實際、カフカス

の自然の描写に關して、ブーシキン自身が読者の注意を呼びかけている脚注で、やはりカフカスの自然を詠みこんだ先達の詩人の作品を二つ紹介しているが、そのうちジューコフスキイによる詩（一八一四年）には、カフカスに住まう八種類もの民族名が数え上げられている。^⑪

これらのことは、ブーシキンが比較的初期の時代から、個別の民族性について少なからぬ関心を持つていたことを示している。前にも述べたように、全般的に、当時のロシアでは西欧の啓蒙主義やロマン主義文学の思想の流入によって、民族的に多様な文化の個別の価値について認識が高まり、一方で國の版図の拡大によって、その多民族性が意識された。また、戦地や流刑地での現地の人々との接触は、当時の知識人に民族文化の多様性について実際的な裏付けを与える、それぞれの差異を確認せしめた。このことは、もとより民族的なものを理想的なものと做す雰囲気の中で、彼らが一層民族文化の個別性、それぞの独自性を重視することにつながった。

そのような中で、ロシアの知識人たちは、西洋と東洋それぞれの個別の民族文化に深い関心を持つただけでなく、その間に位置するロシア人自身の民族性についても、活発な議論を行つた。文壇においては、それまでの西欧追随的な文学・思想形成のあり方に対する苛立ちから、ロシアの歴史、ロシア語、正教の信仰などにロシアの独自性を見出し、それらを源泉にして国民文学を確立することの必要性が声高に叫ばれた。^⑫

この国民文学についての議論に対する反響として、第二の特徴的

な主張が生まれてきた。それは、民族に特有な性質というものは、その歴史や言葉にテーマをしばらなくとも、思考や感情の習慣として自ずと文学作品に現れるものである、とするロマン主義的主張である。

プーシキンは、論文「文学における民族性について」（一八二五年）の中で、次のように述べている。

「気候、統治形態、信仰は、どの民族にも独自の相貌を与え、それは多かれ少なかれ、詩の鏡の中に映し出される。どんな民族にもそこにしかないような思考や感情の形があり、そこにしかないような習慣や迷信、癖が山ほどもあるのだ。」⁽¹⁹⁾

つまり、民族の獨白性というのは、思惟的にその要因を選ばなくとも、その欲するところに従つて書けば、自ずと固有の詩となつて現れる。例えは彼は、シェークスピア、ラシーヌ、アリオスト等が、本国以外を舞台にした作品を多く産みだしたことを例にとって、そこにもやはり「民族性〈narodnost〉」はあるのだ、としている。ここで、「民族性」の決め手となるのは、具体的なものではなく、思考の指向性のようなもので、その場に生じた要求に応じて思想を向けておれば、自然な形で詩の中に浮かび上がつてくるものである。そしてそのような状態で生じた個別的なものであつて始めて、芸術の普遍性との弁証法的な関係を持つにあたり、意味を持った作品となる。ここでは「民族性」の思想的な特徴が指摘されているが、それぞれの独自性は環境に応じて自然に与えられるものとして捉えられている。

では、その「民族性」とは、具体的にどのような意味内容を持つのかというと、それはかなり曖昧で、西欧の国々との比較において言われる場合には「国民性」の意味に近い。しかしロシア国内の多民族性がかなり明確に意識されていた当時、「国民性」の意味の表す領域が「民族性」の語の表す内容をすべてカバーしていたとは考えにくい。その他に少なくとも二つの意味を合わせ持つていたと考えられる。一つは人間の、いわゆるエスニックな意味での類別の基範となる「民族」〈narod〉の概念を指し、他方で農民や町の職人等、庶民の階級的な「民衆」〈narod〉の概念をも併せ持つ。この、民族性と民衆性の二重構造とも言えるような仕組みが、当時の議論の第三の特徴として挙げられる。

このような仕組みは、今日の環境にあっては理解しにくいものだが、当時の階級間の構の深さを考慮に入れると分かり易い。当時、文壇の知識人の悉くは貴族で、平民や農奴等の「民衆」は彼らと全く異なる生活様式をもつっていた。フランス革命と啓蒙思想は貴族階級の民衆に対する意識を高め、またナポレオン軍との戦いは、共通の敵を前にした戦場において、平民出身の兵士と貴族将校の交流を可能にした。ところが、そこで貴族知識人の見出した「民衆」は、彼らにとって他民族と同様「他者」だったのである。

当時、デカブリストを中心に、貴族知識人の間に共有されていた民衆主義（ボピュリズム）的雰囲気は、それまで知られざる「他者」であった民衆の、農奴制の下で苦しむ姿を照らし出し、彼ら民衆こそ「歴史の担い手」であるとしてその解放を訴えた。⁽²⁰⁾

この「他者」である民衆の姿をよりよく映し出そうとする志向を如実に物語るのが、ブーシキンの散文で書かれた作品「ゴリューヒノ村の歴史」（一八三〇年）である。⁽¹⁾作家志望だが題材に窮していだ若い領主が、屋敷の中で偶然見つかった、歴代の領主によってつけられた過去の歴帳をひもとく。するとそこに、自分の領有するゴリューヒノ村の歴史について驚くべき事実が隠されており、それをもとに創作を進めていくという筋書きだ。

主人公は創作に入る前に、ロシアのある片田舎の小村ゴリューヒノ村の住民（領有農民）について、詳細な民族誌を提示する。そこでは「ゴリューヒノ人」の風俗や習慣、外見的特徴や文化に至るまで、統計的に明らかにされる。その次に主人公の創作が続き、村の歴史が展開される。まだ地主が豊かで、村の管理が寄り合いで選ばれた村長に任されていた頃、人々は家族的な共同生活を営み、平和な日々を過ごしていた。そこへある年、身を持ち崩した地主が最後の自分の領有地である村にやってきて、直接厳しい取り立てを行うようになつてから、從来の共同体は消滅し、村は衰えていく。

前半の民族誌では、滑稽なまでの細部に渡って村の住民について記述されはいるが、後半の創作部に比べて、實際何も伝えるところがない。こうしてブーシキンは、當時文壇で流行っていた、思想よりも思想性が重視され、その媒体としては民族と民衆の二つの概念の間で越境性が見られた。

しかしこの作品で重要なのは、「コーカサスの捕虜」でチエルケス人の担つた役割を、ここではロシアの一農村の領有農民が担つて

いるということである。どちらも家族的な共同生活を営み、自然と共存する形で生活していたが、近代文明のもたらす慘禍に触れるごとにより、本来的な姿を失つて、滅びゆく運命にある。

ここで見方を換えれば、異なる民族性を持つチエルケス人も、異なる生活次元に生きる領有農民も、貴族知識人からしてみれば「他者」であり、それと同時に近代的な文明社会の失ったものを補つて全体性を保つ表現者となつてている。そこでは、人間の本来あるべき姿を文学の中で具象化するものとして、民族と民衆という二つの概念の間の垣根がとり払われている。つまり、民族性と民衆性という二つの意味合いが、「民族性」〈narodnost〉という語の表す領域において容易に入れ換わつており、その二つは分から難く結びつき、溶け合はさつていたのである。

以上の論点をまとめると、次のようになる。一九世紀の初頭においてロシアの知識人の間では、民族性を理想的なものとする見方に起動力を得て、個別の民族文化に対する関心が高まつていった。そのような中で、當時彼らが社会的・政治的におかれていた状況に従つて、独自の民族性理解が形成されていった。そこでは、個別の民族文化の独自性が強調され、それを表現する際には物質的なものよりも思想性が重視され、その媒体としては民族と民衆の二つの概念の間で越境性が見られた。

これらのことと鑑みると、当時の「民族性」という概念は、むしろ「人間性」という語の意味に近い。そこでは個々の存在が独自性をもち、その独自性が思想的な形で現れ、かつ民衆主義的であるこ

とが、人間の普遍的な価値を与えるものと見なれた。「民族性」を備えるとは、あらゆる人間に普遍的な価値に寄与する姿勢に他のないなかつた。当時のロシアの作家や詩人たちは、裏諭は「他者」と間近に接するよりむしろ「情報を得ながら」この普遍的な価値に資する「民族性」を、作品の中に表現してゐたのである。

題注・文献収録

- (1) 「アーチキン詩集」金子善彦訳、新星社、一九四八年、二十九頁。
- (2) Dostoevskii,F.M., Sobranie sochinenii v desyatotomakh, Moskva, 1958, Vol.10, PP.456-157
- (3) 一八一五年一二月に起つたクーデター未遂事件の参加者をいへ。一月を意味する「ドカブニ」(dekabr') ふくわしく。軍人の他、多くの思想家、作家、詩人が專制政治の打倒、農奴制廃止を訴えてこれに参加したが、時の皇帝ニコライ一世の軍隊によつて簡単にねらえられた。首謀者の五人は絞首刑に、残りの者たちがサンベリアやカフカス地方への流刑に処せられた。
- (4) パーフェーヴィーの啓蒙思想が当時ロシアに与えた影響についての文献を参照。
- Tokarev,C.A., Istoki etnograficheskoi nauki, Moskva, 1978, PP.108-134; Begunov,Yu.K., 'Russko-evropeiskie literaturnye stvazi epokhi predromantizma', Na putyakh k romanizmu, Leningrad, 1984, PP.237-277; Yusufov,R.F., Russkii romanizm nachala XIX veka i natsional'nye kul'turi, Moskva, 1970, PP.66-81.
- (5) ルターベルクシット大尉の記述によれば、次の文獻を参照。 Danilevsky,R.Yu., 'I.G. Gerder i svavnitel'noe izuchenie Liter-
- (6) ロバト・ミネル、東洋文化の歴史の文部省の教科書によるべし。 Kaganovich,C. 'Romantizm i vostok', Voprosy literatury, 1979, No2, PP.153-173。
- (7) Lovikova,N.M., Pushkin i vostok, Moskva, 1974, PP.6-8
- (8) Kaganovich,C., op.cit., P.169
- (9) アーチキン、「吹雪」、神西清訳『ペペーブの女王・マールキ〉物語』所取、一九八四年、和波文庫、一一〇頁。
- (10) ナボンカの戦争と同時のロシアの思想界への関係については次の文獻を参照。 Manuilov,V.A., Otechestvennaya voyna 1812 goda v zhizni i tvorchestve Pushkina, Leningrad, 1949
- (11) リヤーゼババヤーは、ナボンカの半島の不正確な地図を指摘し、それを壁立のない冷静な判断をもつて回答を加へたところ、彼が一矢を酬つた。 Vyazemskii,P.A., 'O razbore tpekh statei, pomeshchenykh v zapiskakh Napoleona, napisannom Denison Davydovym' (1825), Polnoe sobranie sochinenii knyazya P.A. Byazemskago, St. Peterburg, 1878, vol.1, PP.193-197
- (12) Shparo,O.B., Osvobozhdenie Gretsii i Rossiya, Moskva, 1965, P.108
- (13) Pushkin,A.C., Puteshestvie v Arzrum vo vremya pokhoda 1829 goda, (1836), Polnoe sobranie sochinenii, Izdatel'stvo akademii nauk SSSR, 1938, Vol.8, P.477
- (14) 一八三九年一月半紀のロシアの歴史の教科書によれば、云々のや論を参照。 Yusufov,P.F., op.cit., PP.136-151; Lasnuk,L.P., 'Problema stanovleniya russkoi etnograficheskoi nauki', Istorioografiya etnograficheskogo izucheniya narodov

atur v Rossii', Russkaya kul'tura XVIII veka i zapad-

noevropeiskie literatury, Leningrad, 1980, PP.174-217

レジ、Kaganovich,C. 'Romantizm i vostok', Voprosy literatury, 1979, No2, PP.153-173。

Lovikova,N.M., Pushkin i vostok, Moskva, 1974, PP.6-8

(8) Kaganovich,C., op.cit., P.169

(9) アーチキン、「吹雪」、神西清訳『ペペーブの女王・マールキ〉物語』所取、一九八四年、和波文庫、一一〇頁。

(10) ナボンカの戦争と同時のロシアの思想界への関係については次の文獻を参照。 Manuilov,V.A., Otechestvennaya voyna 1812 goda v zhizni i tvorchestve Pushkina, Leningrad, 1949

(11) リヤーゼババヤーは、ナボンカの半島の不正確な地図を指摘し、それを壁立のない冷静な判断をもつて回答を加へたところ、彼が一矢を酬つた。 Vyazemskii,P.A., 'O razbore tpekh statei, pomeshchenykh v zapiskakh Napoleona, napisannom Denison Davydovym' (1825), Polnoe sobranie sochinenii knyazya P.A. Byazemskago, St. Peterburg, 1878, vol.1, PP.193-197

(12) Shparo,O.B., Osvobozhdenie Gretsii i Rossiya, Moskva, 1965, P.108

(13) Pushkin,A.C., Puteshestvie v Arzrum vo vremya pokhoda 1829 goda, (1836), Polnoe sobranie sochinenii, Izdatel'stvo akademii nauk SSSR, 1938, Vol.8, P.477

(14) 一八三九年一月半紀のロシアの歴史の教科書によれば、云々のや論を参照。 Yusufov,P.F., op.cit., PP.136-151; Lasnuk,L.P., 'Problema stanovleniya russkoi etnograficheskoi nauki', Istorioografiya etnograficheskogo izucheniya narodov

SSSR; zarubezhnykh stran, Moskva, 1989, PP.9-26

trekh tomakh, Moskva, 1986, Vol.3, PP.101-115

(¹⁵) ローランズの翻訳誌の書籍は、ヨーロッパ（Golovnin, V.M.,

1776-1831）のものと、日本の近海に船を運んでいた船員が書いた。

彼は一八一一年に國後島で幕府の役人に捕らえられ、松前で数年

監禁された後、解放された。帰国後に、彼が日本人の風俗などを

記録した「ヨーロッパの風俗記」は、注目を集め、ロシア語以外にもヨー

ロッパの数ヶ国語に翻訳され、間もなくオランダ語版が販売

始める。日本語の翻訳は、1820年に横濱で出版された。

Yoshikazu, 'Pervye svedeniya o russkoj poezii u yaponsev', in

Zadornava, N., 'Pervye literaturnye kontakty' Voprasy literatu-

ry, 1975, No.7, PP.220-229.

(¹⁶) 「カナダの民族誌的著述」として、次の文獻を参照。

Gusev, V.E., 'Vklad dekabristov v otechestvennuyu et-

nografiju', Dekabristy i russkaya kul'tura, Leningrad, 1975,

PP.80-104

(¹⁷) Pushkin,A.C., Kavkazskii plemnik, Poinoe sobranie sochinenii,

vol.4, P.116

例文書、サルクニツカ、リヤーチカベキー等の艦隊が現れる

文書。Kryukhbel'beker,V.K., 'O napravlenii nashei poezii,

osobenno liricheskoi, v poslednee decyatletie' (1824),

Sochineniya, Leningrad, 1989 PP.436-442; Vyazemskii,P.A.,

'O Kavkazskom plemnike, poved; soch. A.Pushkina' (1822), Pol-

noe sobranie sochinenii, St. Peterburg, 1878, Vol.7, PP.73-78

(¹⁸) Pushkin,A.C., 'O narodnosti v literatire' (1825-1826), Polnoe

sobranie sochinenii, 1949, Vol.11, P.40

(¹⁹) Gusev,B.E., op.cit., P.82

(²⁰) Pushkin,A.C. 'Istoriya sela goryulkina' (1830) Sochineniya v

PUSHKIN'S PERSPECTIVE ON NATIONAL TRAITS

— On the Background of Russian Romantic Literature in the First Half of the 19th Century —

Masanori GOTHO

In the first half of the 19th century, while Western European philosophy of the Enlightenment and Romantic literature streamed into Russia, the Russian intelligentsia sympathized with the people who had suffered from tyranny of the czar and farm-slavery, and appealed through their literature for human liberty.

Reading the works of poets and critics of those days, we can notice that they were very interested in the originality of nations. Such an 'originality' spoke to the particular geopolitical and historical situation Russia found itself in, as well as Western European-formed ideas of Enlightenment and Romanticism.

In this paper, I will give careful consideration to the perspective of national traits which were discussed in detail in literary circles of the day, focusing especially on Pushkin. I will argue that 1) they had a general disposition toward national traits regarding both East and West; 2) they appealed to an 'ideal orientation' concerning national traits in literature, as opposed to material factors; 3) their understanding of national traits depended upon both ethnic and popular considerations.

As I will show, literary works, which spoke to national traits, were left as masterpieces of art, and remained even after things become turbulent. They have continued as original texts to be interpreted according to requirements of the times. The problems I will delineate in this paper should be considered in connection with the thereafter problems concerning nationality in Russia and in the Soviet Union.

Key Words

Pushkin
Russia
Romantic literature
national traits
Dekabrist